

母権論 (連載第九回) エジプト (五)

第七八章 [承前]

以上の事實は我々を再び、女性神官と女性裁判官のいたドドナへと、そしてさらにキュレネとラリサ (二七) が姉妹として現れるテッサリアのペネイオス河畔の地 (二八) へと連れ戻す。左、或いは母の側の強調は、したがってペラスゴイの宗教段階と関係していることになる。この段階ではポセイドン^{II} 大地的な觀念が支配しており、その物質主義は物質的女性的原理を自然の中心に据えている。ペラスゴイの母性の表現がラリサであり、この名は湿润な河畔の地と密接な関連を持っている。ストラボン (二三・六二一) の明言するところでは、あのペラスゴイの名を持つ全ての町は河畔やそれに類する地におかれていたとのことである。(二九) 実際ペラスゴイ人は、テッサリアのペネイオス河、ドドナの湖、ポー河の河口、クティリアの聖なる湖といった湿润な水辺を好んで入植地に選んだのであった。湿地帯では、あらゆる大地の豊饒を生み出す源と考えられた水と大地のあの混交が生じる。そこで

ヨハン・ヤーコプ・バッハオーフェン
佐藤 信行・三浦 淳・桑原 聡 訳

は水は男性的なはらませる力 (三〇) として、受胎させるファロスとして、したがってペオス〔希・ペニス〕、ペネイオス河、ペレウス (ペロス)〔希・粘土〕として、ラル^{Lar} (三一) として (ここからエリスのラリソス川、及びラリオス湖 (三二) が名づけられた)、スペルケイオス川 (三三) (種をまく^{スベイレイン}) に由来) として、砒素^{アルゼン} (三四) として、いつも最初に供儀が捧げられるアケロオス河 (三五) として、オルピオス (三六) として、ラドン川 (三七) として現れるのである。それに対して大地は受胎する母胎であり、男性の水分を胎内に取り入れそれによってはらまされる。(三八) この交わりにおいては受胎させる水分を物質の側が支配している。ダナオスの娘たちの容器や、ウエスタの女神官の濾し器や、イピメディアの胸に入った水が消えてしまうように (三九)、水分は物質の中に姿を消してしまう。ペラスゴイ族の祖としてラリサ (四〇) は立っている。ラリサ Larisa という語は Lar という語幹に女性形語尾をつけ、なおかつ男性のペオス^{Πεος}〔希・ペニス〕の一部を挿入して形成されたものである。こうして、(ペラスゴイという)

民族名の由来については諸説紛々としていたが、ペオスとラルを合わせて作られたということが反論の余地なく証明されたことになる。(四二)とこゝろで湿潤な沼沢地の祭祀における母性の優位は、ペラスゴイのラリサとラリュムナ(四三)によってのみならず、以前すでに言及した(四三)イオクシダイの母神祭祀、オシリスに対する母神イシスの優位(四四)、「大地と水〔希〕」という語順、アレテースとエウペモスの土塊(四五)の意味するところから明らかである。しかしこうした思考法にとりわけ合致するのはイアソンの左靴に関するテッサリアの神話であつて、この靴は沼地に沈んだがそれはヘラの好意と助力のためであつたという話である。

(四六)我々はここに自然力に関するペラスゴイ人の考え方をうかがうことができる。大地的ポセイドン主義の結果として、宗教と家族制度において女性的物質的な左側、良き側(四七)に優位を認めるあの考え方である。女の「質料〔希〕」に、男性生殖力としてのラルが向かい合っている。ラルのこうした宗教的な意味からラルス、ラルテイウス(四八)の意味が生まれるが、しかしまた、よくあるように(Wodan-Gwodan(四九)もその例だが)Gという初音を付加して、ペラスゴイ王を表わす言葉ゲラノール Gelandor とゲラス Gelas(五〇) (クラン Clan [英:一族、氏族]と同根(五一)が生まれたのだし、そしてペオス Heos [希:ペニス]と結びつくことでペラルゴス *περαργός*、つまりコウノトリという単語(近代ギリシア語ではペオス *peos* が抜けて *το νελην* となつている)が生じたのである。(五二)

ペラスゴイという民族名とコウノトリの名称とは、こうしてみるとその内的な関連からして結びつくことが明瞭である。それはコウノトリの宗教的意味に基づいている。この低湿地の王者は男性生殖力を表わす水を象徴しており、水はペラスゴイのアケロス宗教によれば自然の根本を成している。それ故、*περα* と同様水を意味する *περα* から、ペロポネソスの古称であるアピアも、またアイスキュロスが『嘆願する女たち』(二六二)でナウパクトス(五三)の出自であるとしている聖牛も、その名を得ているのである。(五四)ペネイオス河畔の低湿地ではコウノトリは神聖な鳥と見なされていた。コウノトリはペラスゴイ人の神だったのである。コウノトリは有害な蛇の駆除によって土地の者たちに大きな善行をなしているというプルタルコス(五五)の説明にも、それなりに意味は認められるけれども。民族名とコウノトリは、一見互いに無関係なように見えるが、事実、こうして同じところに発しているのであり、ミユルシロスの全く皮相な説明(五六)に逃れる必要はない。カベイロイの密儀を再興した女性ペラルゲ(五七)や、ゼウス・ペラルギコス(五八)には「コウノトリ〔希〕」の名はいささかの変更も加えられずに現れているのだから。(五九)

以上をまとめてみるならば、ペラスゴイという民族名、ペラスゴイ人の概してポセイドンの大地的な宗教段階、そしてヘルニキ・ペラスゴイ人の左側崇拜の間に、内的な連関が存在することは明らかであろう。ペラスゴイのヘラ女神、湿つた大地物質としての母性把握、「土着の者〔希〕」と言われるペラスゴスがニオベ

の子とされること (六〇)、「同じ歩調の母〔希〕」(六一) 神殿とラリサとの結びつき——これらは右で述べた左側崇拜といささかも切り離せないものである。

第七九章

イアソンの勝利は、ヘラの庇護と、アルゴー号乗組員の導き手たるこの女神の配慮により彼が左靴を失くしたことよつていゝる。左側は彼に幸福をもたらしたのだ。ちょうど最古の卜占によれば左の鳥が幸福を約束するものであつたように。(二) この点を押さえておくと、英雄「イアソン」がペリアスに話しかけるに際して曾祖母エナレア〔「エナレテ」〕が双方に共通の祖であると述べている下りには一層大きな意味が認められよう。『ピュティア頌歌』第四歌一四三行で彼はペリアスに、「一頭の牝牛がクレテウスと勇敢なるサルモネウスの母であつた〔希〕」と述べている。クレテウスとサルモネウスそれぞれの第三代目がイアソンとペリアスである。(三) 両者の血縁関係は、したがつて彼らが曾祖母エナレアを共通の祖と仰ぐ点に基づいている。曾祖母を想起させることイアソンはペリアスの心を動かし争いを平和裡に収めようとしているのである。

ベークは次のように推測している。(三) ピンダロスがこの親類関係にある二人の男子を『ピュティア頌歌』第四歌の〕描写に取り込んだのは、この例をアルケシラオス王 (四) に示すことで、ダモピロスに対し同じような態度をとつていただきたいと懇請す

るためであつた、だがそうなるとダモピロスとアルケシラオスにも同様の血縁関係があると考へねばならず、ダモピロスがイアソンの子孫であるのに対しアルケシラオスはエウペモス (五) の子孫であるから、両者の血縁関係を根拠づける人物としては一族共通の母が、それもかのエナレアがあるのみであり、そうなるを母を父より強調するという奇異な現象も十分に説明がつくからだ、といふのである。

この推測の当否はひとまず措いて、クレテウスとサルモネウスに限定してピンダロスの言葉を吟味してみよう。註釈者は、母方の出自を強調することを尋常ではないとしてこう述べている「第四歌、二五三a」。「一頭の牝牛とは不適切な言い方だが、子を生んだ者を意味し、すなわち母のことを言う。他方クレテウスとサルモネウスの母はエナレアという。(b) または一頭の牝牛とは比喩として一人の女のことである。とりわけ彼らが父親の側、すなわちアイオロスからではなく、女から〔生まれた〕と〔ピンダロスは〕理解した。それ故もしも彼らの祖父——一方はアイソンの祖父であるクレテウス〔実際は父〕、他方はペリオスの祖父であるサルモネウス〔実際は義父〕——が互いに母を同じくするものでないとするならば〔それは言えないはずである〕。(c) それ故『我々は同じ一族だ』と言われている。〔希〕」

父より母が優先的に言及されている事情について、註釈者もはやその真の意味を認識していなかつたことは明らかである。太古の思考法によれば、血縁関係を作るのはまさに母、母胎なのだ。

すでにこれだけでも母系強調の説明としては十分であるが、なおもう一つ別の根拠を付け加えておこう。父を同じくする「同血者 consanguinei」の場合よりも、母胎を同じくする「母を同じくする者 uterini」或いは「同腹ホモガストロイの者〔希〕」の方が、愛情の度合において濃いのである。(六) 問題のピンダロスの詩句に関してとりわけ重要なのはこの観点である。なぜなら、血筋の共通性だけではなく、その結果としてあらゆる争いを排し愛情を抱き合うべしという掟が生まれることこそが、イアソンがオペリアスに、ピンダロスがデモピロスの件でアルケシラオスにとくと言い聞かせた点なのだから。詩人はこう歌っている(第四歌、一四五行)。「見よ、運命の女神たちは恥を隠しつつ姿を消す、血縁者たちのもとで無恥な争いごとが起こるならば」。(七) 次の言葉(一四四行)は、自分とペリアスは共にエナレアの息子を祖とするのだとイアソンが述べたものだが、これもまたあの母権の精神によって語られているのである。「今日黄金の太陽を見ている私たちは、彼ら〔クレテウスとサルモネウス〕を祖ビエテラテス先として三代目に当たる。〔希〕」(ここでは男たちは「植ビエテえつける者〔希〕」として現れている。ちようどディオニユソスが「生ビエアルミオスみ育てる者〔希〕」であり「樹木アエドリスの者〔希〕」(八)であるのと同じように。彼らと息子の関係は種蒔人と果实の關係に等しいのであり、種蒔人は果实に対し何らの血縁的つながりも持たない。太陽の黄金の力のもとへと送り出すのは、ルクレティウスが述べているように(『物の本質について』一・四)母の行為である。

比較のために、来訪したイアソンに対するペリアスの問い(第四歌、九七行)をここに引用する必要がある。「異国の方よ、どこの国をあなたは自分の祖国と主張なさるのか、暗い腹からあなたを送り出したのは地上に生まれた人間たちのうちの誰なのだ。〔希〕」これに対して古註は「一七四a」こう述べている。「(人間たち)という表現にふさわしいのは男について使う(子エテケンを作る)という語である。一方ここで用いられている(暗い腹から生み出す)にふさわしいのは(女)であつたらう。これは女に該当する表現だからだ。〔希〕」したがってペリアスが彼の問いで使用したのは、もっぱら母とその出産に用いられる表現であつて、「子エテケンを作る」のような男女両用の表現でも、「生エケンセーネンませる〔希〕」や「種エスアレンを蒔く〔希〕」のような(男専用)の語でもなかった。子供を胎内の闇の中から生み出すのは母である。父は遠いところにいる「原因」であつて、ピンダロスの詩句にあつてもそう把握されているのだ。実際ペリアスの問いは、誰があなたを生ませたのかではなく、もつとまわりくどいものであつた。つまり、母があなたを暗い母胎から光のもとへと生み出すような、そんな行為をしたのは誰なのか。

ピンダロスの「暗い腹から送り出す〔希〕」という表現は、同様に「暗闇〔希〕」を母性の表現としているプルタルコスプルタルコスの記述を想起させる。ちなみに、こうした母性と闇の組合わせは、アリストパネスが『鳥』で宇宙生成論を展開した際に最初の卵を生むとしたニユクス、すなわち太母たる夜(九)についてしば

言われていることでもある。さてプルタルコスであるが、「ギリシア人に関する問題」の二〇「P・二九五f」によれば、プリエネ「カリアの町」の女たちの最高の誓いは「椶のそばの闇に誓って〔希〕」であるという。女たちが呼びかけているのは暗い物質を生み出す太母に対してであって、光ある地上に生まれてきた被造物たる夜の椶の木に対してではない。この神木よりも、暗い母胎としてそれを生んだ初源の闇の方が高くそびえ立っており、死者たちはこの初源の影に回帰する。だから女たちは第一にこの影を神聖な誓いの言葉としたのである。

以上の註釈を加えた後で、私はもう一度ピンダロスの「母である一頭の牝牛〔希〕」という表現に戻ろう。先の註釈者もペーク(二七四ページ)もこのぶしつけな言い回しに不快感を覚えている。ペークはこう書いている。「一頭の牝牛〔希〕——高祖母エナレアについては慇懃でもなく十分名譽あるとも言えない見方がなされている。これを私は、牝牛を男に、牝牛を女に喩える古代の素朴さのためと認めるけれども、しかしここでは格言的な言い方が下敷になつて見られるので、何故クレテウスとサルモネウスの父ではなく母が挙げられているかの理由もそこから説明がつくかも知れない……これは最古の格言的知恵であつて、これを用いてケイロンの弟子「イアソン」は自らの表現を裝飾している。(祭の翌日は岩だらけの地へ〔先樂後憂〕〔希〕)「一四〇行」という表現をも参照されたい。シュミットは巧みに自国の諺(彼らは一腹の子だ〔独])と比較しつつ、(一頭の牝牛〔希])

は格言的表現と認めている。〔羅〕

現代風の色合いを帯びたこの註釈は何の説明にもなっていない。「古代の素朴さ〔羅〕」が何の役に立とう。また自らしばしば母に倣つて「ピリユラの息子」(二〇)と名のつた賢明なケンタウロス族の一人ケイロンを引き合いに出し、「格言的知恵〔羅〕」と言うことが何の役に立つというのか。母が同じだということではなくせいぜい双子についてしか使えない表現「一腹の子」に喩えたと何になろう。母を「牝牛〔希〕」と言い表わすのは、授乳する牝牛と大地との結びつきにその根拠を有するのである。母は大地のイメージで見られ、特にエジプトやアジアの宗教ではそうしたイメージのもとに崇拜を受けている。「万物を生み出す大地の豊饒の像〔羅〕」とアプレイウスは『黄金のロバ』(一一・一一)で母を呼んでいる。(二)したがって「牝牛〔希〕」と言われた女は大地と比較されているのであり、大地物質の持つ母性との関連において表現されているのである。「牝牛〔希〕」たるエナレアは大地ガイアの代理人そのものであり、人間の女(女——^{ギネネー}大地^ゲ〔希〕)は大地ガイアの任務を引き受けなくてはならない。それ故にアフロディーテーエロスの関係が前面に出てくる。強調されているのは種族と母性の觀念である。「牝牛〔希〕」は「母〔希〕」の意味を負う。実際、エジプトのミュケリヌスは自分の娘の遺体を牝牛の体をくり抜いた中に埋葬し、それによって彼女を神のごとき榮譽にまで高めたのだった。(二二)母の名にひそまってきた高貴と威厳は、「牝牛〔希〕」になると一層強くなる。宗教的シン

ボルと結びつくことによって母の名は神聖で侵すべからざるものとされる。したがって母の名は主として、徹底して宗教的な基盤に立つ母権制の時代に対応する。すでに我々が見たとおり、女性支配のリュキアでは養い育てる母の像がクサントスのハルピュイア記念碑に表わされていた。(二三) したがって、「母である一頭の牝牛〔希〕」という言葉はイアソンの口をつけて出てきて何らおかしくはない。この言葉によって神聖さ、威厳、権力、そしてひよつとすると最高の美すらもが表現されるのであり、イアソンはエナレアと親族関係がこうした特徴を持っていると述べているのである。

アイスキュロスの『アガメムノン』一一二五行でカサンドラが警告を發しつつ言う有名な文句「あの牝牛から引き離して、その牝牛を〔希〕」は、少々違った風に理解しなければならぬ。彼女の予言には比喩的な、謎めいた言い回しがふさわしく、クリュタイムネストラの高い権力には「牝牛〔希〕」という表現が、アイギストスの残虐行為には「牝牛〔希〕」、つまり海中から立ち上がり受胎をもたらす動物と同列におくことがふさわしい。したがってこの場合にはピンダロスの「母である一頭の牝牛〔希〕」とは全く異なる側面の両性関係が出てきているのである。

これまで説明してきた『ピュティア頌歌』第四歌の一部分と『ネメア頌歌』第六歌の導入部分とは、ベークが考えているらしいほどに大きく隔たつてはいない。というのは、ピンダロスは神々と人間世界を分け隔てるかの深淵を認めてはいるが、彼の主たる

考えはやはり、両者の類縁関係を強調し、それにより高い意識を喚起して、人間世界の無常という痛ましい感情を克服するところにあつた。こうした類縁関係もまた共通の母を持つことによつていゝ。「一方に人間の種族があり、もう一方に神々の種族がある。そして一人の母から我々は息をしている。〔希〕『ネメア頌歌』第六歌冒頭」(二四) ここでは神々と人間の違いが前面に出てくるものの、詩人はすぐその後で類縁関係を認めている。そしてこの類縁関係は、共通の母を基盤とするが故に、それだけ一層親密で、慰めに満ちたものである。違いを強調することはだから彼の真意ではない。註釈者もまた正しく強調しているように、(二五) 前面に出ているのはむしろ同一性を認める考え方なのである。ピンダロスは事実、太古世界の根本思想に従っている。この思想によれば、神々と人間は同一の物質的太母を持ち、ディオニュソスは「牡山羊」(二六) として地上のあらゆる被造物と共に同一の始源卵から生まれ、イシスはオシリス及び人間の母であり、死すべき人間は不死の母を持ち、「永遠に揺るぎない座〔希〕」(二七) たる大地は神と人間の双方に与えられたものであり、ガイアは「神々の中で最高のもの」(二八) と言われている。サルモネウスとクレテウスを結びつけるのと同じ関係が、神々と人間世界をも結びつけている。死すべき人間と不死の神々の類縁性は母に由来する。母系により介された最大の高貴さが人間にはあるのだ。万物の頂点にある大地に付与された優位の中にこそ、人間の家族における母権の基礎と模範が宿っている。

第八〇章

右で母方の出自を強調したピンダロスの頌歌二箇所に触れたが、註釈者の学識からすればこれをアリストテレスの発言と比較したとしても不思議はなかつたろう。註釈者に代わって我々がこの作業を行うことにしよう。

『ゲノス』〔希…「種族・誕生」の意〕と言われるものは、一つには同族の持続する生殖である。人類が存在する限りは、つまり人類の生殖が続く限りはそう言われるのだ。他方、多数の個体に対しその最初の動因によって生を喚起してやるものもそう呼ばれる。したがってある人々はヘラス人と言われ〔他の人々はイオニア人と言われるが〕、それ故一方の人々はヘレンを最初の祖とし、他方の人々はイオンを祖とする。そして種族は、彼らを生んだ質料によってよりもその父によって名づけられるが、一方物質の方も前面に出てくることがあり、時々種族を女の名によって名づけることがある。例えばピュラの子孫と言われる種族がそうである。(一)

「ゲノス」という言葉の様々な意味を述べるに際して、アリストテレスは、種族の祖としては通常は父の名が挙げられるが、逆に最初に生んだ者たる母との結びつきが強調されることもあると指摘している。その証拠として「ピュラの子孫」が挙げられているが、ここからオプスのロクロイ人と、中央ギリシアのレレゲス人が想起される。「ピュラの子孫」は、これら種族の母権制につ

いて注目すべき証拠となるので、この点については後で(二)詳細に見ていくことにする。ここではとりあえず男女両性に関するアリストテレスの捉え方に注意しておこう。

アリストテレスは男を「最初の動因〔希〕」、女を「質料〔希〕」と呼んでいる。この捉え方はしばしば見られるものだ。(三)『形而上学』一・六〔p・九八八a二以下〕(四)は女性原理を木に喩える一方で、男性原理は「形相〔希〕」であるとして木から机を作る指物師に喩えている。指物師は一人きりであっても沢山の机を作ることができる。それと同様に、男は沢山の女をはらませることができ、物質はただ一度はらむだけである。男は「形相〔希〕」であるのに対し、女は「質料〔希〕」であるから「生誕の容器にして水槽、座、宿、場所〔希・羅〕」である。(五)したがって男は動きを与える原理と見なされている。質料たる女性への男性力の働きかけによって生命の動きが始まり、「可視的なコスモス〔希〕」の運行が始まるのである。最初は万物が静止していたとするなら、男性の最初の行為によって物質のかの永遠の流れが始まるのである。この流れは最初の「動因〔希〕」によって呼び起こされ、ヘラクレイトスのよく知られた喩えによれば、一瞬たりとも同じであることはない。ペレウスの最初の行為によってテティスの不死の母胎から死すべき種族が生まれる。(六)男は死を世界へともたらず。母そのものは不死を享受するのだが、ファロスによって目覚めさせられてその胎内から一つの種族が誕生する。この種族は川の流れのように常に死に向かって走り、メレア

グロスの燃え木のように^(七) 絶えず己れを焼き尽くすのだ。女性の「質料〔希〕」に対し、男性は「形相〔希〕」の位置を占める。男性は物質ではなく、形を与える原理であり、工作者なのであるが、形とはアリストテレスとプラトンにしばしば見られる思考法によれば、非物質的であるが故に神に近いのである。そもそも神そのものが最も純粹で美しい形として現れる。こうした考え方に従うなら男はデミウルゴス^(八) となるのであり、女とは対蹠的に創造者の位置を占めるのである。ちょうど神がコスモスに己れの形と美を与えるように。こうして男の本質は「魂〔希〕」であり、女のそれは「身体〔希〕」であるとされる。この結果、アリストテレスにせよ一般に古代人にせよ、人間の出自を女性原理に帰する思考法は父に帰する場合より原初的で物質的な見方だとしたのだった。したがってこれは同時に根源的な見方でもあるに違いないとされた。

先に示した例ではこの時間的な関係がはっきり表に出ている。ピュラはヘレンより年上である。^(九) レレゲス—ロクロイ人の祖たる母として彼女は伝説に登場する。彼女は一人で偉大な祖となった。男と肉体的な交わりを行うことなく人類を生んだからである。^(一〇) 人間の男女はピュラの骨であった。形のない岩の出自が大地にあるように、人間は誰もが体の出自を彼女に持っている。岩石種族と母系種族は同じなのだ。岩石種族には父はなく母がいるのみである。彼らは「ピュラの子孫〔希〕」であり、世代を重ねてもそうであり続ける。なぜならこの岩石種族の女は

誰もがピュラなのであり、岩石の女なのであって、この祖たる母から生み出されその代理人となって、彼女の始めた仕事を継続するのである。したがってピュラ一族の母権制はこの種族が岩石から生まれたという神話に正しく表現されている。岩石にあっても母権制種族にあっても「形相〔希〕」ではなく「質料〔希〕」が問題となるのであり、それ故死ぬことと岩石に姿を変えることとはしばしば同じと見なされるのである。

これをふまえるなら、ピュラ神話のどの版にも共通している特徴、すなわちテミスが母の骨を後向きに投げるよう命じているのはなぜかが解明される。種族の継続という観点からすると、母権制には祖があるのみで、父権制には子孫のみが存在する。「最初の動因〔希〕」としての父は、川の源のように、彼に端を発する動きの最初の一突きである。これとは反対に母は始まりではなく常に終わりである。連続と続く母たちは太母たる大地の代理人なのだ。すなわち大地太母は絶えず生ける姿で地上に現れている。死んだ者たちが彼女の背後に長い列をなして続いている。世代と共に太母も前に進む。それ故彼女は「同じ歩調の母〔希〕」であり、世代と共に同じ歩調を保ちながら進む大地太母なのである。^(一一) その時々々に新たに地上に現れる彼女は長い系列の始まりではなく終わりをなすのであって、こうした仕組みの中にあつては最も古い女ではなく最も新しい若い女が、すなわち最前列に位置する「若い女〔希〕」が優位を得る。^(一二) 新たな子が生まれるたびに太母は前に進むのであり、したがってどの女も後向きに石を投

げると言えるのである。こうして母なる物質のみを念頭におく思考法が成立する。父を造型者にしてデミウルゴスと捉える思考法はこれとは異なっている。父に端を発した動きは世代から世代へと継続し、しかもそれでいて「最初の動因〔希〕」はその場所を離れて「同じ歩調で〔希〕」世代の後を追うことはない。男は子孫が続き広がっていく様を眼前に見る。それは物質たる女が、他を動かすのではなく自らが動きつつ、子孫を背後に見るのと正反対である。父はいつでも始まりであり、最初の父は最初の始まりである。それに対し女はいつも終わりであり、最後の女は最初の女、最初の女は最後の女なのである。父権制下においてのみならず自然〔法的〕な母権制下にあつても、「家族の母は最初にして最後である〔羅〕」(二三)という言い回しはあてはまるのであり、両制度の相違はといえ、母権制においてはこれと同じ見方、現存する個体のみを重視する見方が男にも適用されるという点だけである。それ故、ピュラ神話にあつては男も女も石を背後に投げるのであり、これに対して父権制下でなら逆の向きに石を投げたであろう。

以上のような一連の観念から出てくる結論は、厳密に言えば「ゲノス」という表現は母系民族には適用できないということである。「質料から〔希〕」の生まれは「ゲノス」とは本質的には結びつかない。ヘレンの子孫がヘラス人、イオンの子孫がイオニア人と呼ばれるようになったのに対して、ピュラの肉體から生まれた者たちは物質的な言い回しを用いて「ピュラの子孫」と言われ

ている。彼らは氏族としての統一性を持たない、純粹に物質的な集合体なのである。ピンダロスの表現「一方に人間の種族があり、もう一方に神々の種族がある。そして一人の母から我々は息を息している〔希〕」はこれに対応している。神々と人間は、一人の母の肉から生まれてはいるが、にもかかわらず一つの「ゲノス」を形成することはない。物質的な生まれは共通ではあつても、その上に父の相違を通して種〔ゲノス〕の相違が形成されるからだ。こうした事実から同時に見てとれるのは、物質的な起源は包括する領域を広げていくのに対し、男性的起源は限定をもたらずということである。前者は総括的で絶えず伸び広がる性格を、後者は外部に対する遮断と分立という性格を持つ。したがつてタキトゥスが「ゲルマニア」二〇・二三)次のように述べているのは正当である。すなわち、ドイツ人は主として姉妹の子を人質に要求する、というのもそれによつて生じる拘束が広範囲に及ぶからである、というのだ。(二四) 実際ローマの慣習にも同様の思考法が見てとれるのであつて、姉妹の子の幸福をレウコテア・マトウータに祈つたのである。(二五) 「ゲノス」と父方の出自との結びつきは、特にローマの氏族に残つていた。なぜなら氏を持ち得るのは、本来的には「父の名を挙げる」ことができる。

〔羅〕(二六) 世襲貴族のみであつたからである。一方、「民族 nation」という言葉はこうした市民法的な意味とは無縁のままであつた。「民族 nation」という言葉に現れているのは、物質による生誕という女性的な自然的思考法である。(二七)

「ゲノス」と「民族 natio」のこうした相違に絡んで別の相違が浮かび上がってくる。種族の始まりを男性の「最初の動因〔希〕」に求める思考法から出てくるのが、各世代を結びつける「継続、overlappers」の観念であり、これに対し種族の始まりを女性の「質料〔希〕」に帰する思考法は、全くこれとは異なる「繰り返し」という観念を生む。この相違をアリストテレスは加法と乗法の相違に例えて(一八)強調している。ドドナの釜を叩くと響きが途切れることなく続いていくように、(一九)男性の動きは子々孫々に至るまで伝わっていく。したがって氏族にあつては、今行われた生殖も最初の動因の結果に他ならないのである。これに対して女性的物質に起源を求める民族は、多数の孤立した個体から成り立っており、これら個体は継続によつてではなく、繰り返しという関係によつてお互い結びついているに過ぎない。先行する母に代わつて現れる新しい母は、誰もが互いに関係を持たない個別の存在である。彼女らが互いに関連を持つとすれば、それは各々が自らの内に太母たる大地を表現していることのみによつていゝ。まさにそれ故に生まれる子は木の葉に似る。葉もまた互いが互いを生み出すのではなく、どれもが母なる幹から生まれ、したがつて同一の現象の永遠の繰り返しとして存在しているからだ。(二〇)葉と葉を互いに結びつけるものが樹幹という太母に他ならないが故に、葉にその種族を尋ねるなどは馬鹿げた行為と言うべきであらう。それと同様に、母権民族も太母以外の祖先は持たず、子も誰もが大地そのものを母としているのである。

私の誤りでなければ、この関係は「レレゲス *releges*」という民族名に表現されている。レレゲス人にはピュラ伝説があり、またロクロイ人という女性支配的民族もレレゲス人を祖とする。

(二一)「レレゲス」とは、ペラスゴイという名称の基礎ともなっている語幹(「ラ或いはラル」を豊音化〔繰り返し〕)することによつてできた民族名なのであり、現代ギリシア語の「レレギ *relegi*」
 || コウノトリに対応しているのである。(二二)さて、この語根の繰り返しにはどのような意味を認めればよいのか。「ギリシア語の」動詞の完了形を作る際に豊音を用いる意味以外の何物でもない。すなわち繰り返しということである。繰り返すことで、一方では過去という観念が生じる。何故なら第二の行為は第一のそれを過去へと押しやるからであり、これにより完了形が形作られるのである。また、「ラという語根の意味たる」生殖行為を繰り返すことにより繁殖という観念が生ずる。それ故女性の「質料〔希〕」に起源を持つ民族名が形成されるのである。さらに「繰り返しによつて」規則的で周期的な再来という観念が生ずる。それ故「レレギ」は毎年飛来するコウノトリの名として使われ、「レランテイオン平原〔希〕」(二三)は、繰り返し収穫をもたらすと賞讃されたカルキス近郊の土地名として用いられるのである。

父権民族と母権民族の間に見られるような「継続」と「繰り返し」の相違は、ローマ市民法の領域の類似現象を見れば一層分かりやすくなる。故人の財産の相続法上の承継サクセシオンとは権利に及ぶだけであつて「占有 *possessio*」という純粹に事実に基づく所有

には及ばない。(二四) 相続人は自らの力で占有を新たに根拠づけねばならない。「占有に關してはいかなる承継もない。〔羅〕」にもかかわらず相続人は、時効取得期間 (二五) の算定にあたって、前所有者の所有期間を自分の所有期間に算入することが許された。

かくして権利と所有の關係は次のように言うことができる。すなわち所有の場合には最後の所有者が出発点となり、権利の場合には逆に最初の所有者が出発点をなすと。所有關係に対応するのが母権民族であり、権利に対応するのが父権民族である。前者はその背後に多くの祖先を持つが、この祖先は一本の樹木に毎年生える木の葉にも似て、同質で独立した個体の集合という点で互い關係を持つに過ぎない。それに対して後者は継続の關係にあり、構成員は全て「最初の動因〔希〕」の継続なのである。母権民族は現に生きている一番若い女性を前面に押し出す。それは、所有期間の算定にあたって最も新しい所有者からさかのぼるのと同じである。父権民族は、権利がそうであるように、「最初の動因〔希〕」から始める。この一致は決して偶然ではない。「所有」と女は、事實に基づく物質性という点で本質を同じくし、「権利」と父性原理は、「形相〔希〕」或いは形を与える原理の非物質性という点で共通している。したがって母権民族の社会構造全体は必然的に所有の性格を強く帯びる。なぜなら「質料〔希〕」が優位を占めると見なされるところでは必然的にそうした状況にならざるを得ないからである。とりわけ純粋な女性支配には、個体の死を超え

て法的な個人が存続するという觀念が欠如していたように思われる。こうした承継と継続の觀念は精神的父権に由来するのであり、ローマ法の偉大な業績の一つをなしているのである。母権制下の相続は「個体」消滅の觀念に、父権制下のそれは継続の觀念に基づく。ローマの相続人は被相続人の人格に同化し、自己の権利を先行者の権利の上に基礎づける。これに対してリュキア女性は母が所有することを止めたが故に所有するのである。

こうした「リュキアの」相続關係は、アキアのデアナ神域 (二六) に勤める神官のそれに類似している。決闘で勝利を収めた者が自己の権利を前任者の死の上に基礎づけるのであり、承継關係の上にそうするのではない。最新の権利保有者は連綿たる前任者の一群を背後に有するが、後継者を持つことはない。歴代の神官たちを結びつけているものは唯一、仕えている女神に対する等しい關係である。権利を誰に帰すかを決闘で決めるという方法は例外なく、事實に基礎をおく物質的な法原理に完全に所屬している時代たることの証左である。アテナイオスによればキュレネ人は決闘を好んで行ったということであり (二七)、またストラボンによれば、ローマとアルバ、テゲアタイ人とペネアタイ人、アルゲイオイ人とスパルタ人の間でテュレアティスの領有をめぐる決闘を通しての決定がなされた (二八) が、こうした決定法は「ギリシア人の太古の風習〔希〕」だという。(二九) 以上のような証言はしたがって、太古の女性支配時代の写し絵にとって決して小さからぬ特徴を提示しているのである。現実の所有という觀點が

法の精神的観点に対していかに優位を占めていたかは、プルタルコスの記事から明らかとなる。(三〇)ミノス王の町(三一)であるクレタ島のクノッソス・カイラトスでは金を借りた者が借りた金額を奪うというのだ。金を借りた者は金に対する己れの関係を貸し手から導き出すのではなく、むしろ自らの行為によって基礎づける。こうした特徴全ては最古の法と女性的自然原理との結びつきを告げている。女性的自然原理は自己の物質的所有的性格をこの法に分かち与えているのである。

母権民族と父権民族の対蹠的な思考法とその展開を見ると、古代人がプロメテウスとエピメテウスの神話で語ろうとしたものとの内的親縁性を示していることが分かる。母権民族は「質料〔希〕」の物質的原理に、父権民族は「形相〔希〕」の精神的原理に属している。それと同様に、エピメテウスにあっては物質とあの意識されざる自然の必然性とが優位を占め支配的であるが、一方プロメテウスはこの自然の必然性に対して精神的原理を勝利へ導かんと努めるのである。エピメテウスのもとにはヘルメスによって女の原型たる美しいパンドラが届けられるのに対し、プロメテウスはこの災いに満ちた贈物を受け取らぬよう警告を発する。自ら決定を下すことをせず唯々諾々と物質の法に服するエピメテウスは、『神統記』(五一—一行以下)(三二)に描かれた特徴からしても、「質料〔希〕」が「理性〔希〕」を支配する純粹に物質的な自然を体現している。こうして彼は物質的母性の原理と密接に関連するのであって、神話の系譜が彼を、ロクロイ人の始祖ピュ

ラ——「ピュラの子孫〔希〕」の名のもとになったピュラ——の父としていたことの意味は大きくなる。(三三)ピュラの一族における「質料〔希〕」の優勢は、エピメテウスのパンドラに対する関係と完全に一致する。この一族が属している純粹に物質的段階においては、形を与える男性原理は決定し支配する原理としてではなく、決定され奉仕する原理として現れる。それに対してプロメテウスは、形を与えるという男性的な行為に己れの根拠を持つ人間の代表として現れる。プロメテウス、そして粘土から人間を創る彼の技術によって、アリストテレスの「男||形相〔希〕」という観念に対応するデミウルゴスとしての男が立ち現れてくるのだ。「質料〔希〕」は従属し、「形相〔希〕」が支配する。机の所有者は木ではなく指物師であり、またローマ法は父権の根本理念に従い、原料の所有者ではなくその加工技術者に金属製品の所有を認めている。アテナイの町がプロメテウスを崇敬して行った炬火競走(三四)には種族の継続性が現れていた。この継続性は「質料〔希〕」ではなく、「形相〔希〕」が頂点に立っているところでのみ姿を現すのである。連綿と続く世代は同一の炎の担い手であり、最初の動きを与えた者は炎が子孫によっていつまでも保持され続けるのを見る。エピメテウスとその死すべき起源に対しては、あの形作る行為もこの炬火競走も適用されることはない。この二つのものはプロメテウスの精神原理にのみ属しているのだから。二人の人物の対立はさらに続く。いつも人間に恐ろしい死の姿を想起させ、希望の代わりに没落を人間の道連れに与える病氣や労苦

は、エピメテウスに結びつけられる。(三三) 他方プロメテウスは眼差しを太陽の領域に向け、最終的には人間を天上に住まう者たちのところへと導く。というのも十三代後にヘラクレスが精神的な光の法の勝利を完成することになるからだ。(三六)

こうした対立から見えてくるのは、エピメテウスの非精神的・物質的原理があ希望なき宗教段階に他ならないということである。この段階では没落と自然の暗い側面が前面に出ており、キュレネにおけるごとく死者崇拜が重要な意味を持ち、そしてエリニウスたちの血なまぐさい職務が(三七) 暗く恐ろしい死の掟として人間存在を支配しており、光の力が与えるような贖罪への希望もない。これら太古の現象は全てただ一つの原理から生じている。すなわち「質料〔希〕」に認められている優位からである。それは物質の支配する暗澹たる時代であり、女に優位を与え、物質の血なまぐさい法^{レヒト}以外を知らず、決闘で己れの力を測り、万事に於いて自然の法^{メゼツツ}に従い、大地の被造物の法^{メゼツツ}、すなわち死という暗い力におびえ震えている時代だったのである。希望なく苦痛という苦痛に身を任せ、自己決定を下すことなく悔恨の涙に暮れる時代であり(三八)、人間が背後に投げた石のごとくに個々の生を忘却するに任せ、種族の存続に眼を向けない時代なのである。物質的束縛が母の大地的法の特徴である。自由・解放と精神的生とに覚醒するや否や、父性原理への移行が始まる。この原理は太陽を指し示し、プロメテウスの苦難を経て、ついには最終的な勝利に到達するのである。

*

*